

自治大卒業生の声

自治大学校卒業生（修士課程連携特別研修（マスターコース））

香川県 政策部予算課 三木 博司

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1 はじめに

私は、令和7年度修士課程連携特別研修を受講しました。このコースでは、自治大学校で過ごししながら、一橋大学国際・公共政策大学院（公共法政プログラム）の修士課程を1年で修了しました。

1年で必要な単位を取り、修士論文を執筆し、さらに自治大学校の講義もいくつか受講します。本当にできるのか不安に思ったものですが、しかし、当初考えていた以上に得るものが大きい研修となりました。

2 大学院での学び

私はこれまで、主に事業課を中心に業務に従事してきており、自分がしている仕事が制度・政策的にどのような背景があり、何を根拠にしているのかについての理解は弱かったと思います。それはそれでどうなんだとは思いますが、そのような人間にとって、公共政策や関係する法令・制度について体系的に学ぶことができたのは、今後、私の香川県庁生活において大いに効いてくると感じています。

一橋大学国際・公共政策大学院では、自治大学校でもおなじみの行政法や地方自治制度、憲法などがあったほか、NPOの方や医師による講義、学術的な講義、中央省庁の方々の講義など、様々な視点から多岐にわたる講義を受けることができました。学びたい分野の講義を自ら選んで受講することができたのも非常にありがたかったです。特に、国の最新の政策や過去の大きな制度変更等

について、実際に携わった方から実務の言葉で語られ、政策・制度に対する解像度が大きく高まりました。

修士論文の執筆は正直難航しました。指導教官に適宜相談をしながら、一つの課題についてひたすら深掘りし、様々な角度から検討していきました。通常2年かけて行うことを1年でやりきるという、濃密な時間を過ごすことができたと思います。

大学院の講義は基本的に少人数で、教員とコミュニケーションを取りながら進んでいきます。多くの質問をし、逆にされることもあり、また、研究室では他の社会人学生（中央省庁や国税局、都道府県）や学部を卒業したばかりの若い学生と様々な観点から意見交換・討論ができ、自由な発想に触れ、刺激的な毎日を送ることができました。

3 自治大学校での学び

自治大学校では、実際に研修を受けたのは2科目でしたが、生活・学習の拠点として多くの時間を過ごしました。

自治大学校の研修生の方々とは、昼夜問わず、様々な分野について意見を交換することができました。大学院での意見交換も貴重な機会ではありましたが、談話室での全国各地の自治体から集まった研修生との意見交換も、違った魅力がありました。談話室には特別な設備があるわけではありません。それでも、あの空間には不思議な力がありました。大学院での講義を終え、ふと立ち寄ると、誰かがいて、誰かが話している。最初は近況や食事の話だったのが、気づけば「うちの自治体だと、これが本当に難しくて」「どう説明している？」と、実務の核心

に触れる話題に変わっていく。しかも堅苦しい情報交換ではなく、笑いがあって、つつこみがあって、相手の主張にうなづく時間があって、そこからふっと真剣な話に移る。その緩急が、むしろ本音を引き出していたように思います。一口に自治体職員と言っても、人口規模、地理条件、医療資源、産業構造、財政力、住民との距離感、組織文化など、前提条件が驚くほど違い、自分のところでは当然の手続きが、別の自治体では成立しない。逆に、こちらが「それは無理だ」と思い込んでいたことを、別の自治体は工夫で乗り越えている。談話室で交わした何気ない会話は、自分の常識をほどこ、視野を広げる気づきを与えてくれました。

また、声を大にして言いたいことは、図書室のありがたさです。大学にも図書館はありますが、こと行政・公共政策に関する蔵書は、自治大学校の図書室も充実しています。休日を含めて朝から夜遅くまで利用でき、レポート課題等では大変お世話になりました。司書の方にも大変良くしていただき、修士論文のテーマに関係するような内容の記事をご教示いただいたこともありました。寮の自室で机に向かっても、集中しきれない、頭が散らかっていて、資料を読み始めても言葉が入ってこない。そんなとき、図書室の存在には大変助けられました。

4 研修生としての生活

さて、ここまで比較的真面目な(?)ことを書きましたが、日々の生活にも少し触れておきたいと思います。

1年間を自治大学校の寮で過ごし、そこから大学院に通い、講義を受け、空いた時間や講義終わりに研究室で他の学生と議論や勉強をしていました。そのまま外に食べに行ったり、寮に戻って、他の研修生と食べて、飲んだりといった日々を送りました。

休みの日や夜には、他の研修生や大学院

生と話題のお店やスポットに出かけたり、誕生日会を行ったり、大学院で学祭やクリスマスパーティーに参加したりと、多くの思い出を作ることができました。不摂生になりすぎないように、自治大学校内にあるトレーニングルームにも通い、他の研修生と一緒に体を動かすこともありました。研修生、大学院生ともに年齢に関係なく友人ができ、なんだったら、学生時代よりも学生っぽいことをしていたような気さえします。

振り返ると、連携コースならではのかけがえのない時間を過ごせたと感じています。

5 おわりに

地方行政・公共政策を中心に様々な知識を学び、研修生や学生と議論し、濃い1年を送りました。研修前は、地方公務員として学んでおいた方がいいのではないかという比較的軽い気持ちでやって来ましたが、ここで学んだことを生かす機会は思いの外早くやってきており、既に現在の所属でもフル活用状態で、実務に役立っています。

そして、得られたことでもう一つ大事なことがあります。それは、姿勢の変化です。大学院を修了する際、教員から送られた言葉があります。かのガンジーの「明日死ぬかのように生き、永遠に生きるかのように学びなさい」です。自治大学校の教官や大学院の教員の中には、この言葉を体現されているような方が多く見受けられていたように思います。どこまで近づけるかは分かりませんが、学び、還元し、行政の質を少しでも高められるよう取り組んでまいります。



(自治大学校グラウンドより夏の思い出)